明治大正文學全集

第三十四卷

武者小路實篤
長與善郎

著

春陽堂版

（非賣品）

著作權者檢印

裝幀恩地孝四郎

明治大正文學全集・第卷四冊・第十五回配本

昭和三年七月十二日印刷
昭和三年八月十五日發行

著作者代表者　武者小路實篤
東京市京橋區南傳馬町二丁目六

發行者　和田利彦
東京市京橋區南傳馬町二丁目六

印刷者　木呂子斗鬼次
東京市京橋區南傳馬町二丁目六

發行所　春陽堂
東京市京橋區南傳馬町二丁目六
電話京橋　六五二　四四一五
振替東京一六一七

整版所　新倉東文堂　印刷所　日東印刷株式會社
製紙場　富士製紙株式會社　製本所　高崎製本所
表紙布地　生田商店　製箱所　中田製箱所
口書印刷所　早川印刷所　扉印刷所　竹田印刷所
見返印刷所　塚本印刷所

明治大正文學全集 第卅四卷 目次

武者小路實篤篇

著者筆蹟……扉裏
耶蘇……三
或る日の一休（一幕三場）……九一
わしも知らない（五場）……九八
二十八歳の耶蘇（一幕）……一一〇
その妹（五幕）……一一九
愛慾（四幕九場）……一九〇
ある畫室の主（六幕）……二三七
第三の隱者の運命……二七一

長與善郎篇

著者筆蹟……扉裏
青銅の基督……四七七
陸奥直次郎……五二二
春田の小說……五九六
自作短評（武者小路實篤）……六五七
解說（長與善郎）……六五九
著者近影（卷頭）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

武者小路實篤篇

95

本心に本心にいやが上
に忠実であれ
そして本心を鍛え
るだけ鍛え磨け
るだけ磨け　寳貝笹馬

耶蘇

武者小路實篤

一

福音書にかゝれた耶蘇の系圖はヨゼフの系圖で、ヨゼフの血が耶蘇にかゝはりがないとすれば、それが一々くわしくかゝれてゐるのは自分には不思議に思ふ。ともかくさう云ふ血統のヨゼフを養父としてマリヤを母として耶蘇は三十歳までは無名の人として生きてゐた。それ迄のことは傳說として見れば面白い話も、美しい話もある。十二歳の時耶蘇が既に人並はづれた聰明さを持つてゐたことがイエルサレムの寺院で僧侶と話をしてゐた逸話（ルカ二ノ四〇―五二）で傳へられてゐるが、その他はまるでつたへられてゐない。耶蘇も自分の若い時の話をされなかつたと見える。自分は其處にいろ〳〵の想像を入れることが出來ると思ふが、その事實は想像を超えてゐることが多いと思ふから、其處には沈默の幕をおろして、その前に跪さたい。

ともかく耶蘇は三十位までは神の子となれなかつたことは事實だ。耶蘇は段々神の子になりつゝあつたらう。それが三十位になつて一時に輝き出した。そしてそれは洗禮ヨハネの力があることはたしかだ。

耶蘇は舊約聖書をよくよんでゐたと思ふ。そして自分を救世主ではないかと私かに思つてゐたであらう。其處へヨハネの聲はひゞいた。

「天國は近づけり悔ひ改めよ」

「我は水を以てバプテスマを爾曹に施へり、我後に來る者は我に優りて能力あり、我はその履のひもを解くにも足らず、彼は聖靈と火を以てバプテスマを爾曹に施はん」

耶蘇は其等の言葉を聞いて「後に來る者」は自分であると心私かに思つたであらう。

二

耶蘇はヨハネの洗禮をうけた。それはたしかに心の上にもうけた。耶蘇がヨハネから洗禮を受けた時、ヨハネがすぐこの人が救世主だと認めたと云ふことは自分は事實としては信じられない。その後ヨハネは弟子を出して耶蘇を本當の救世主かどうかを聞かしてゐる。しかし自分にとつてそんなことはどうでもいゝ。耶蘇がヨハネによつて自覺をはつ切りさせたことはたしかだ。荒野の誘惑は比喩であるか、本當に耶蘇が幻影を見たのか、それも知らない。とも

かく耶蘇の精神上に起つた苦悶を示してゐることはたしかと思ふ。耶蘇は其處ではまだ迷つてゐる。迷つてゐるが故に悪魔に突込まれる。耶蘇が自分に奇蹟を行ふ力のないことにたいする疑問が出てゐる。耶蘇は世界中の人を餓えさしたくなかつた。しかしその力が自分にないことを感じないわけにはゆかなかつた。自分自身さへ餓えた。彼は四十日四十夜食ふことはしなかつた。そして餓えた。其處に悪魔はつけこんだ。

「お前がもし神の子ならば此石に命じてパンと爲せよ」

耶蘇にはそれは出來ないことだつた。彼は

「人はパンのみで生きる者ではない、唯神の凡ての言葉による」と答へた。

自分は敢て云ふ。この言葉はまだ權威の十分にはない言葉だ。「人はパンのみにて生きる者にあらず。」之は本當だ。「唯神の凡ての言葉による。」この「唯」がいけない。前にある「のみ」とこの「唯」とは言葉が合はない。それから「神の凡ての言葉による」の「言葉」と云ふ言葉が少しあいまいだ。其後の耶蘇はそんなあいまいなことは云はない。しかしこれは福音書をかいた人の罪かも知れない。

左近氏の譯によると、

「人は、パンのみに基きて活く可らず。されど神の口を通じて進み出づるあらゆる言に基きて」

之だと少しはいゝやうでもあるが、しかし何處かあいまいだ。權威が少し足りない。ぴたりと來ない。其處には隨分大きな本當のことがかくれてはゐるが、まだそれが顯はれ切つて居ないやうに思へる。

次ぎにくるのは自己の生命の問題だ。どんなに眞理の爲に迫害されても死なゝい自分でありたいと思ふ弱點を悪魔は突いて來た。

耶蘇は宮の高樓に立つた。其處で悪魔は云ふ。

「お前がもし神の子だつたら自分の身を下へ投げよ、それは『なんぢが爲に神その使者に命ぜん、彼等手にて支へ爾が足の下に觸れざるやうすべし』と本にかいてあるから」

耶蘇はそれに

「主たる汝の神を試みるべからず」と云つた。

その答へは正しい。しかし云ひ譯にとれる。其處に何となく權威はない。だから悪魔を逐ひ去ることは出來ない。悪魔はなほ彼を山の上につれてゆく。

しかし自分はその前に耶蘇が水上を歩いた時の話をこゝで思ひ起したい。耶蘇は水上を歩いたか歩かないかはわからない。だが其處では神を試みる爲に水上を歩いたのではない。そしてそれを少し疑つたペテロが

「主よ、もしあなただつたら私に命じ水をふんであなたの處に行かして下さい」と云つた時、耶蘇は來いと云つた。

そしてペテロが浪を見て恐れをいだくと共におぼれかけ救ひを求めた時に

「信仰うすき者よ、なぜ疑ふのだ」

と云つてゐる。この言葉には權威がある。

自分はこの事實を信じ切らうとは思はないが、耶蘇の信仰の次第に確かになつたことを語る話として面白く思ふ。耶蘇はこゝではもう悪魔の誘惑なんぞまるで問題になつてゐない。高樓からも平氣でとびおり、とびおりられないペテロに「汝、信仰うすき者よ」と云ひ兼ねなく見へる。「神を試みるべからず」と云ふ言葉は本當の言葉ではあるが、まだ神を試みやうとする意志のほのめきを見る。

第三の誘惑は、地上の權利を獲得して、この世を權力をもつて改造しやうとする誘惑だ。それを虛榮を得やうとする誘惑のやうに福音書にかゝれてゐるのは少し解釋ちがひと思ふ。

「お前がもし平伏して私を拜んだら、私はお前に、凡て之等のものを與へる」

と悪魔は云つてゐることになつてゐるが、之は悪魔としては少しまづすぎる。

「お前がもし神の子ならば、凡て之等のものはお前の意のまゝになるはづだ」

と云ふ方がなほ恐ろしい誘惑になる。しかしこの愚かな悪魔の誘惑を、さすがに耶蘇は權威をもつてはねのけた。

「サタンよ、退け、主たる汝の神を拜し、惟之にのみ事ふべし」

この言葉、この本心の前には悪魔は去らないわけにはゆかない。

「主たる汝の神を拜し、惟之にのみ事ふべし」

それが神を知るものにとつてはすべてゞある。耶蘇は遂に神の子になつた。

この時ヨハネがとらはれた。この事實は耶蘇をうごかさないわけにはゆかない。彼の決心はかたまつた。

三

洗禮のヨハネも大した人である。彼は身に駱駝の毛衣を着、腰に皮の帶をつかね、蝗蟲と野蜜を食ひ、ヨルダン川で人〻にバプテスマをさづけてゐた。彼を殺すことをヘロデさへ恐れた。彼の名は四方にひゞき、四方から悔ひ改める爲に彼のもとに集つた。

耶蘇は彼に就てかう云つた。

「お前等は何を見やうとして野に出たか風に動かさるゝ葦をか、それならばお前等は何を見やうとして出たか豫言者をか、さうだ、私はお前達に云ふ、彼は豫言者よりもすぐれた者だ。夫なんぢに先ちて道を備へる我が使者を我なん

ちの前に遣らんと錄されてあるのは卽ちこの人だ。更にお前達に云ふが婦の生んだ者の中まだバプテスマのヨハネより大なるものは起らなかつた、しかし天國の最小き者も彼よりは大である。律法と豫言者はヨハネまでだ、其のち神の國は宣傳へられる。皆つとめて之に入らうとするのだ」

この言葉でヨハネと耶蘇の關係ははつ切りするであらう。

ヨハネは道をそなへたものである。その役目をすましてとらはれの身になつたのである。後にくる者はあらはれなければならない。

自分はこゝにヨハネの言葉としてしるされたものをのこらずかいておかう。それには山上の垂訓と隨分似通ひのあるものすらある。實にヨハネは野に叫べる豫言者、バプテスマを施すものである。

彼に就ては奇蹟は傳へられない。しかし火の如き言葉が彼の口よりほとばしる。

「汝等、心を改めよ、そは天國は近づきければなり」

「汝等、主の道を整へよ。汝等、彼の道を直くせよ」

「凡ての谷は、塡められん、凡ての山はならされん。曲れる處は直きものと成らん。嶮しき處は平なる道と成らん。主の榮光は示されん。あらゆる肉は神の救ひを見ん」

パリサイ人、サドカイ人等の來たるものを見ると彼は云つた。

「汝等、蝮の子孫！ 誰が汝等に來らんとするいかりを避ることを告げしや。然らば悔改めにかなふ果を結べよ。汝等、われらが先祖にアブラハムありと云ふことを意ふ勿れ、我汝等に告げん、神はよくこの石をもアブラハムの子とならしめ給ふなり。今や斧は樹の根に置る、凡て善き實を結ばざる樹はきられて火になげ入れらるべし」

之等の言葉には驚くべき熱がある。耶蘇の先驅者として恥かしからぬ力がある。野に叫べる聲と云ふ感じがある。

ルカ傳は更にヨハネの思想上にも耶蘇の先驅者であることを語る。

其處で群集は恐れをなして聞いた。

「それなら、我等は、何をなすべきか」

ヨハネは權威をもつて答へる。

「二枚の肌着をもつものは、もたぬものにわけ與へよ。食物をもつものも亦然すべし」

この言葉が、耶蘇によつて更に力強く更に美しく更に徹底して生かされたことは云ふ迄もないことと思ふ。

稅吏も亦彼に洗禮を受けんとして來、そして同じく問うた。

「我等何をなすべきか」

「汝等に定められたる分よりも多く、汝等、何物をも取立

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

てゝはいけない」

その答へはあまりに簡單明瞭である、だが權威がある。そしてヨハネの善良さが出てゐる。稅吏も之を聞いて心に恥ぢ、同時に心に決心したらう。不正なことをするのはやめやうと。

兵士も又問ふ。

「我等、何をなすべきか」

その答へも極めて簡單明瞭である。

「汝等、何者をも强請勿れ、讒訴する勿れ、たゞ汝等の給料にて滿足せよ」

その明瞭さは耶蘇も有してゐた。しかし露骨な卒直さではヨハネは耶蘇に優つてゐた。耶蘇の答へは時に非常に圓滑だ。金に彫られた像を何だと人に聞いて、カイザルだと云はしておいて、カイザルのものはカイザルに返せ云々と云ふ處なぞも實に賢さを極めてゐる。さう云ふ時がよくある。その點を讃美することはあとにゆづる。ヨハネにはさう云ふ餘裕はない。彼は野に叫べる豫言者だ。その答へは粗野だ、しかし其處に又得やすからざる力と美しさがある。

人々はその力を感じた。そしてヨハネをメシヤではないかと思つた。ヨハネはそれを感じた。そこでかう云つた。

「實際私はあなた達を改心させやうと思つて水で洗禮をする。しかし私より後にくるものは私よりもちからのある者だ、私はその男の履物の紐をとくにも足りない人間だ。その男はあなた達を聖靈と火で洗禮する。その男は手にその男の箕をもつて、自分の禾場をきよめるだらう。その男はその穀物を納屋におさめて、その糠は消えない火で燒きつくすだらう」

ヨハネはなほ多くのことを云つて、人々を悔ひ改めさせ、正しき道に歸らせやうとした。それが耶蘇の心にひゞかぬことはない。それで耶蘇はヨハネの手から洗禮をうけた。そのヨハネが今や、とらはれて、神の道をとくものはこの世に居なくなつた。淸められたる道には再び、雜草がはびこりだした。耶蘇は四方を見まはしたらう。だが自分をおいて誰か、その仕事をなすものがあらう。三十許りまで沈默してゐた、耶蘇は遂に起き上つて福音をとき出した。

彼はその時、十字架を目の前に見てゐたか。

どつちにしろ、彼はすでに神の子になり切つた。神の命じるまゝに生きなければならない。

四

「イエス、ヨハネの囚はれし事を聞きてガリラヤに往き、ナザレを去りゼブルンとナフタリとの界なる海邊のカペナ

ウムに至て此に居れり。この豫言者イザヤの言葉に、ゼブルンの地、ナフタリの地、海に沿ひたる地、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、之等暗きに居る民は大なる光を見、死の地と死の陰に坐する者の上に、光いでたりと云ひしに應ぜん爲なり。この時よりイエス始めて道を宣べ傳へ天國は近づけり悔ひ改めよ」

イエスがカペナウムに行つたのは意識してイザヤの豫言にあふやうに自ら行動したやうにも思へる。それは神意のある處に行かうと云ふ意味で、其處へ行けば何か使命を感じられるやうに思つたのであらう。ともかく知らずに行つたと云ふよりも、知つて行つたと見る方が本當と思ふ。そして門出を神に祝されたく思つたのであらう。

始めての說敎はヨハネに隨分影響をうけてゐたやうに思ふ。「天國は近けり、悔ひ改めよ」この言葉は、耶蘇の口より出るよりも、むしろヨハネの口より出る方が似つかはしい言葉である。

耶蘇はまもなく四人の弟子を得た。四人とも漁夫である。漁夫は最も氣の荒れやすい、殺生を仕事にするものだ。耶蘇は人間以外のものを殺すことはまるでやかましく云つてゐない。漁夫をつかまへても殺生の仕事を責めてはゐない。むしろルカ傳によると多くの魚をとらせてやつたので、その奇蹟におどろいてペテロ等がお弟子になつたやうにも見へる。

馬加傳やマタイ傳によると、たゞ「汝等、我に從へ、我、汝等を人類の漁夫とせん」と云つたゞけで、弟子にしたやうに傳へられてゐる。どつちにしろ、其處に權威は感じられるが耶蘇の神性がぴつたり感じられる程の力はない。耶蘇は又多くの病人をなほし、水を酒にかへたりしてゐるが、自分はそれを大したことゝは思へないものだ。福音書はそれによつて多くの人が耶蘇の下にあつまつて來たやうにかゝれてゐる。このことは嘘ではないとしても耶蘇にとつてさう名譽のことゝは思はない。そんなことは神の如き心を持たぬ人にもある處までは出來ることだ。そして其處には信者の迷信が多く加はつて、奇蹟が事實以上に誇張されてゐるやうに思ふ。どつちにしろ、今の自分には奇蹟は用はない。奇蹟が行へても耶蘇は耶蘇だが、奇蹟が行へないでも耶蘇は耶蘇だ。

自分は少くも耶蘇の最も神の如く生きた瞬間を、奇蹟の內には認めることの出來ないものだ。今の自分は實際奇蹟には無頓着である。

五

それに反して耶蘇の敎へには感心する。實際神の子だけのことがあると思ふ。神の子をほかにしてこんなに權威の

ある言葉があふれ出るわけにはゆかない。自分はこゝで山上の垂訓に就て云ひたい。

神に對して自己を空しくするものは救はれ、自己の小なることを知るものは救はれ、隣人にたいしては他人を責める前に自分を責め、自分を許す前に他人を許し、自己の如く隣人を愛するものが救はれる。その反對のもの、神に對して傲慢なもの、隣人を責めることに嚴しいもの、他人を不幸にして平氣なもの、それ等は救はれない。

神に喜ばれるものは救はれ、神に喜ばれないものは救はれない。この意味を耶蘇は如何に明瞭に力强く具體的に說いたか。誰もが無關心に通り過ぎることが出來ない言葉をもつて說いたか。それを自分は見たい、そして讃美したい。

第一に

「幸福なるかな、心の貧しきもの、天國は其人の有だ」とある。

この心の貧しきと云ふ言葉が、不幸にして少し不明な言葉だ。「自己の心の貧しきことを知れるものは福なり」と云ふ意味ならば自分はよくわかると思ふ。しかし耶蘇はさう云ふもつてまわつた言葉を使ふことは嫌はれる。もつと誰にでも頭からわかる言葉でないと使ふのが嫌ひだ。「心の空しき者は福なり」と云ふ意味か。ともかく神の前に自己の心を押し通さぬものをさしたのであらう。賢くなることを否定された言葉ではない、全世界で耶蘇以上賢い人はない。賢くなればなる程、神に從順になることが大事なことを知る。自分の心を神の心をもて滿たすだけのゆとりを持つものは幸だ。その人は既に天國に住んでゐる人だ。

（ルカ傳では單に「貧しき者は幸なり」となつて、貧民をさしたことになつてゐる。自分はこゝでは矢張り精神的の意味に云はれたやうな氣がする。もし本當に貧民と云ふ意味なら、ペテロ達が、ずつとあとで「富めるものゝ天國に入るのは針の穴を駱駝が通るよりむづかしい」と云はれた時、あんなにおどろくわけはないと思ふ。）

次ぎの

「幸福なるかなかなしむ者、其人は慰められる」

之は明瞭だ。しかし哀みの內に神を恨まぬものは福だと云ふ方が、よりまちがひのない言葉と思ふ。耶蘇の弟子達は耶蘇の言葉をやゝもすると表面的に解釋したがる。

例へば馬太傳に「饑渴くごとく義をしたふ者は」とあるのを、ルカ傳では單に「いま餓えたる者は」となつてゐる。その方が不幸な人を慰めるのに都合がいゝのでついさう云ふ風にしたがる傾があるやうに思ふ。「心の貧しき者」もさう云ふ風にして、貧乏なものは或は無學なものは幸だと云ふ意味にもとれるやうにしたらしく思ふ。元より耶蘇は學

者を嫌つてゐる。しかしそれは神の子にも説教を仕兼ねない傲慢さをもつからだ。「耶蘇を神の子としてすなほに受け入れるものは福だ、その人は既に天國を得た」と云ふ意味にとるのが、一番眞意に近いかも知れない。

第三は

「幸福だ、柔和なるもの、其人は地を嗣ぐだらう」

第四

「幸福だ、餓渇くごとく義を慕ふ者、その人は飽くことを得る」

第五

「幸福だ、あはれみあるもの、其人はあはれみを得る」

柔和なものでも、あはれみあるものでも、皆、他人に迷惑を與へない、他人に不快を與へない、他人によき感じを與へる性質だ。かゝる人は地上にも幸福にくらせ、人〻の喜びを得る。耶蘇は何處までも平和を愛し、他人の氣持を亂さず、しかも正しきことを餓渇くが如くしたうものを愛して居られた。

第六

「幸福だ、心の淸き者、其人は神を見ることが出來る」

第七

「幸福だ、平和を求めるもの、其人は神の子と稱らる」

第八

「幸福だ、義の爲に責めらるゝ者、天國は卽ち其人のものだ」

心が淸く、平和を愛し、柔和で、思ひやりがあり、たかぶらず、しかも義しきものを求め、その爲に責められるもの、それが、耶蘇の最も愛する人間である。

そして最後にかう云つてゐる。

「私のために人が君達をのゝしり、また迫害、いつはつてさまざまの惡きことを云ふだらう、其時君達は幸だ、喜び樂め、天にて君達のむくひは大きい、かくの如く君達より前の豫言者もせめられた」

自分は何もつけ加へることはない。

たゞ自分はこゝで、ルカ傳にある、「併し災ひなるかな、君達富める者云々」は蛇足な氣がする。もう、かう云つてしまつたら、それでおしまいでいゝ。反對を一々露骨に云ふのは耶蘇には少し似つかはしくはない氣がする。自分には之はどうもルカ傳をかいた人がつけ加へたのではないかと思ふ。耶蘇はかゝる氣持のいゝ祝福の言葉のあとに、氣持のよくない、反ぶくに過ぎないやうな呪ひの言葉を出しはしないと思ふ。殊に「災ひなる哉、君達今笑ひおる者、悲しみて泣くべければなり」

なぜとは云はない氣がする、もし云つたとかりにしても自分はそれを耶蘇の爲にとらないものだが、恐らく云はな

かつたらうと思ふ。

「其時は君達は幸だ、よろこびたのしめ云々」で十分である。完しである。

それを

「災ひなる哉、人〻皆、君達をよく云ふ時。そは同じ事を、彼等の父祖は僞豫言者等にもしてゐたから」と、裏返して臆病に模寫したやうなしかも詛ひの文句で終らすやうなことはしないだらうと思ふ。

六

「君達は地の鹽だ、鹽がもし其味を失なつたら何うしてもとの味に復すことが出來やう。後は用はない、外に棄てられて人に踐れるばかりだ。君達は世の光だ。山の上に建てられた城は隱れることを得ない。燈を燃して斗の下におく者はない。燭臺に置いて家に在るすべての物を照すだらう。此の如く人〻の前に君達の光を輝かせ、さうすれば人人はなんぢらのよき行ひを見て、天にゐる汝等の父をあがめるだらう」

之は眞理である。そしてその言葉の燃ゆる力を見よ。之は耶蘇の言葉である。誰もが、之に手向ふことは出來ない。本當のことが實にはつきり、ぴつたり、否定出來ない事實によつて示されてゐる。

又云ふ。

「私が律法と豫言者を破壞する爲に來たと意ふな、破壞する爲ではない、成就する爲だ。私は誠に君達に云ふ、天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂げつくさずして廢ることはない、是故に人も誠の至微き一を壞り、又その如く人に敎へたら、天國に於て至微き者と謂はれる。凡そ之を行ひ且つ人に敎ゆる者は天國に於て大なる者と謂はれる、私は君達に云ふ。學者とパリサイの人よりも君達の義しきことが優らなければ必ず天國に入ることは出來ない」

このことも本當である。神の意志を本當に生かす爲にこの世に來た。神の意志を少しでもといたものに反逆する爲に來たのではない。神の意志はこの世にのこりなく生きねばならぬ。そしてそれを少しでも無視したものは、神の國では小さき者と云はれ、神の意志を生かすものは神の國で大なる者と云はれる。たゞ物識りや、他人を責めるものより義しくならなければ神の國の住民になることは出來ない。このことをいかに耶蘇は彼獨特の表現をもつて、權威をもつて語つてゐるか。我〻はそれを知る時、耶蘇の言葉の無限の深さから稻妻のやうにひらめき出る美に打たれる。

又云ふ。

「古の人が人に告げて殺すこと勿れ、殺すものは審判にあ

ふべしと云つたことは君達も聞いてゐる處だ。しかし私は君達に云ふ、すべて其兄弟を怒る者は審判にあづかるだらう、又その兄弟を馬鹿者といふ者は集議にあふだらう、又狂妄よといふものは地獄の火にあふだらう」

之も本當である。どんな人間をつかまへても、怒るものは怒りを買ひ、のゝしるものはすべての人から非難的に批評される。それはまぬかれることは出來ない。又多くの人に不快をもたれることは地獄にゐるにちかい感じを受けることである。またそれから段々惡意がお互に誇張されてこの世に地獄をうむ起緣になることもありうる。ともかく耶蘇は平和を亂すことを恐れるあまり、さう云ふ芽にあまり敏感だ。少くも天國に入らうとするものは他人と惡口も謹むべきであることは本當だ。しかしいきなり地獄におちると云はれると少し誇張されたやうな反抗的な氣も起り兼ねない。

しかし耶蘇はつゞけて、更にあきらかな具體的な事實を話す。その話し方がいかにも耶蘇らしいのに頭がさがる。曰く、

「だから君達もし供へものを携へて壇に行つた時、其處で兄弟に恨まるゝことあるを憶ひ起さば、その供へ物を壇の前におき、先づ往て君達の兄弟と和ぎその後きて君達の供へ物を獻げるといゝ」

これは本當だ。本當すぎる。之が實行出來れば、その人はもう神の愛に浴した人だ。自分の心を清くしやうとせずに、神に供へ物をしてもそれは何にもならないことは云ふ迄もないことだ。しかし神に祈るのは自分の心を清める力を得たいためのこともある。他人と和解させてくれと神に祈ることもある。耶蘇の云ふ通り實行するものは惠まれた人だ。その人には神の惠みが既にあらはれてゐる。

又云ふ。

「君達を訴ふる者と、偕に道にある時、早く和解せよ。恐くは訴ふる者はなんぢを審官に付し、審官また君達を下役に付し、遂に君達は獄に入れられるだらう。私は本當に君達に云ふ、分厘までも償はなければ必す其處を出ることは出來ない」

本當のことだ。しかし人間はなか〳〵和解してくれないものだ。又和解出來ないものだ。しかしそれは多く自己がつまらぬ見えや、臆病や、づるさや、正直、愛の足りない所が災ひして出來ないことも多い。本當に和解しやうと出來るだけつとめるものに神の惠はあるのだ。

又云ふ。

「古の人が人に告げて姦淫すること勿れ、と云つたことのあるのは君達が聞いた所だ、しかし私は君達に云ふ、凡そ女を見て色情を起すものは心のうちすでに姦淫した者だ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c